

# 吾が逍遙歌

作詞・作曲 第三代生徒会長  
山井 静男

## 解説

- 一、桜の下に春死なん  
古人の恨み懐きつつ  
若き生命の美酒に  
酔わんとすれど術もなし
- 二、青葉にそよぐ乙女子の  
鬢のほつれをかきあげし  
夢の手姿かそけくも  
飛鳥の古仏に似たるかな
- 三、中空高く煌めける  
星の永きに比ぶれば  
英雄の夢重ぬるも  
人の限りを哀しめり
- 四、又流れたり星一つ  
漆黒の闇に消えぬれば  
厳しき御言さながらに  
宇宙の象徴に愕きぬ
- 五、月影青く地を照らし  
夜寒の雁空を行き  
帰らぬ人を思草ひつゝ  
微吟消えゆく穂波川
- 六、徹宵真理の苦しみに  
血涙しぼりて明かすとも  
聞かずや遙かわだつみの  
憂悶永久に血を吐くを

- 一、「願わくは花のもとにて春死なむ  
その如月の望月の頃」の西行さんの  
夢を追いつつ若さにまかせて盃を  
重ぬるも酔うほどに気が晴れない。
- 二、新緑かおるそよ風に鬢のほつれを  
かきあげる少女よ。可愛いくも  
りりしいその姿は、かすかながら  
飛鳥の仏様に似てることよ。
- 三、大空に煌々と輝く星たちの永遠の  
ながれ（動き・運行）に比ぶれば  
英雄たち（人間）の栄枯盛衰は  
はかないものだ。
- 四、流星一つまた一つ漆黒の闇に消え  
る様は、厳かな万物の営みの様に  
宇宙の決まり全ての物を包み込む  
大きさに驚いてしまう。
- 五、月の光が明るく地上を照らし、  
寒々とした夜空を雁が群をなして  
行く。  
帰らぬ人（友）を心ひそかに思い  
ながら、詩を吟ずるも穂波川の  
流れと共に消えて行く。
- 六、夜を徹して語り合う真理の追究に  
涙して明かしたこの情熱。  
聞いてくれるか、はるかな海の神  
（母なる海）よ。  
永遠に続くのか此の青春の苦悶。

「青春とは人生の或る期間を言うの  
ではなく、心の様相を言うのだ」  
米国詩人 サミエル・ウルマン

この歌は古歌・乙女・日本の心の故里  
飛鳥・宇宙・青春の苦悶等を謳い上げ  
たロマン溢れるそして青春の日を心に  
ひびかせる「生涯の青春歌」である。  
平成八年 八尋富士夫

さくらのもとに はるしなむ  
こじんのうーらみいだきつつ  
わかぎいのちのうまざけに  
よわんとすれど すべもなし